

## チベット初期中観思想における二諦説

——二諦の分類の意味をめぐって——

西 沢 史 仁

十五世紀のサキヤ派の大学匠コラムパ (Go rams pa bsod nams seng ge, 1429–1489) は、チベットにおける中観説の学統として、(1) 空性を真実有と見なす常辺中観説 (チョナン派)、(2) 空性を真実無と見なす断辺中観説 (ゲルク派)、(3) 空性を有無の何れとも見なさない離辺中観説 (サキヤ派) の三つを立てたことは夙に知られるところである (『見解弁別』 p. 457.3–5<sup>1)</sup>)。このうち離辺中観説は、〈有でもなく無でもない見解 (yod min med min gyi lta ba)〉と称されるもので、その説では、空性は知の対象ではなく、有無の何れでもないと思なされている。他方、空性を真実無 (bden med) と捉えるツォンカパ (Tsong kha pa blo bzang grags pa, 1357–1419) の断辺中観説は、空性を知によって認識され、知の対象として存在すると見なす見解であるが、それは、コラムパによれば、ツォンカパがラマ・ウマパ (Bla ma dBu ma pa) を介して文殊菩薩から授かった特殊な見解であり、ナーガールジュナ師弟の見解とは矛盾すると評されている (同 pp. 476, 500, cf. 松本 1982, 166f.)。これに関して、筆者は、サンブ系学者の初期の文献を資料として、ゴク翻訳師 (rNgog lo tsā ba blo ldan shes rab, 1059–1109)、トルンパ (Gro lung pa blo gros 'byung gnas)、ギャマルワ (rGya dmar ba byang chub grags)、チャパ (Phya pa chos kyi seng ge, 1109–1169) 等の二諦の定義、その中でも特に勝義諦 (= 空性) の定義に関する解釈を検討したが、その結果、以下の諸点が明らかとなった<sup>2)</sup>。

1. サキヤ派の離辺中観説は、ゴク・トルンパ師弟の解釈を起源とする可能性があること。
2. 他方、ギャマルワ・チャパ師弟はその解釈を批判し、空性を正理知の対象とする見解を提示したが、その解釈は後代ゲルク派へ入った可能性があること。
3. この両者の議論の争点となったのは、『二諦分別論』 k. 3 cd と k. 4 の解釈を巡ってであり、彼らの論争を契機としてサンブ寺において二つの異なる中観説の学統が生じたこと。

この筆者の解釈が妥当であれば、空性を知の対象として存在すると認めるツォンカパの解釈は、決して彼独自のものではなく、チャパ師弟系統の解釈に起源す

るものであることになる。その点を検証する為に、本稿においては、二諦の分類の意味 (dbye ba'i don) を主題として検討を加えていくことにしたい。

## 1. 二諦の分類の意味に関するゲルク派の解釈

二諦説の設定は、一般に、分類基体、分類の意味、数の確定、定義等の一連の主題により科段分けされるが、そのうち分類の意味とは、世俗諦と勝義諦の関係を論じたものである。それは、一般に、『解深密経』を典拠として、二諦は同一でもなく別異でもないことを、それぞれ四つずつの論証を提示して論じられるが、この主題は、二諦の定義に不可離に関わっており、ゴク師弟とチャパ師弟はこの件についても解釈を異にしている。そこでまず最初に議論の端緒を掴むために、後代のゲルク派の議論を紹介しておこう。例えば、ツォンカパは『道次第小論』においてこう述べている。

「第三. 二つに分けられた二つのもの (= 二諦) は、別異である必要があるので、別異である仕方は如何なるものであるのかと云うならば、これについて、(I) 前代の多くの者達 (snga rabs pa mang po) は、(1) 壺と布の如く、〈別異自体 (ngo bo tha dad pa)〉と、(2) 所作と無常の如く、〈同一自体にして別異反体 (ngo bo gcig la ldog pa tha dad pa)〉の二つは、別異であるべき二つのものが共に事物 (dngos po) であるが、(3) 何れか一方が非事物 (dngos por med pa) である別異のものは、〈同一が否定された別異 (gcig pa bkag pa'i tha dad)〉であり、[以上のように] 三つの別異があるうち、二諦は、〈同一が否定された別異〉であると云う。(II) 他方、或る者は、その二つ (= 二諦) は、〈同一自体にして別異反体〉であると認める。」(『道次第小論』192a4-6<sup>3)</sup>)

ここで、ツォンカパは、初期チベット人学者の見解として、二諦を、(I) 〈同一が否定された別異〉と見なす解釈と、(II) 〈同一自体にして別異反体〉と見なす解釈の二つを挙げていることに留意されたい。そして、その直後に、『中観光明論』、『入中論自註』、『菩提心釈』68の聖言を引いて、二諦を〈同一自体にして別異反体〉と見なす解釈を自説としている(『道次第小論』192a6-192b2)。同様の見解は、ツォンカパの『入中論』の註釈である『密意解明』においても、『菩提心釈』67cd-68を典拠として示されている(『密意解明』109a3-5)。

## 2. 初期サンブ系学者の解釈

### (1) 二諦を〈同一が否定された別異〉と見なす解釈

そこで問題となるのは、ツォンカパが提示した二つの初期チベット人学者の解

釈の起源であるが、そのうち、二諦を〈同一が否定された別異〉と見なす解釈は、トルンパの『教次第大論』に見出されるものであることが確認された。即ち、

「第二（＝分類の意味）。〔質問：〕この世俗と勝義の二つは、（1）所作と無常の如く、〈同一のものに法の区別により別異のものとして立てられたもの（gcig la chos kyi dbye bas tha dad du bzhag pa, i.e., ngo bo gcig la ldog pa tha dad）〉であるのか、（2）あるいは、壺と布の如く、〈別異自体（ngo bo tha dad pa）〉であるのか、（3）事物と非事物の如く、〈同一のものとして成立していないことのみから別異として立てられたもの（gcig tu ma grub pa tsam las tha dad du gzhas [pa], i.e., gcig pa bkag pa'i tha dad）〉であるのか、と云うならば、

〔回答：〕最初の二つではない。即ち、〔二諦は〕同じもの（de nyid, lit. それ自体）とも他のものとも言表されないもの（de nyid dang gzhan du brjod du med pa）であるので、〈同一が否定されただけの別異（gcig pa bkag pa tsam gyi tha dad）〉に過ぎないのである。」（『教次第』 p. 610.15-19）

ここでトルンパは、二諦が〈別異自体〉であることと、〈同一自体にして別異反体〉であることを明確に否定した上で、〈同一が否定されただけの別異〉であると明記している。そして、その理由として、同一自体と別異自体であるためには、二項が共に事物（dngos po）である必要があることを明言している。即ち、

「それと同様に、有為（＝世俗）と勝義である空もまた（stong pa'am, read: stong pa'ang）、同一でも他のものでもない。なぜならば、同一自体と別異自体の両者は、事物の法（dngos po'i chos）であるので、勝義である戲論の寂滅と世俗である虚偽の両者には、〔同一自体と別異自体は〕妥当しないからである。相の区別（mtshan nyid kyi dbye ba）のみから〔二諦が〕立てられると認められる。」（『教次第』 p. 611.16-19）

トルンパは、勝義諦を有無の相から離れたものと見做すので（『教次第』 p. 614）、世俗諦と勝義諦の間には、同一自体と別異自体の何れも成立しないと解釈する。〈同一が否定された別異〉は、その点を念頭に置いてチベット人学者により創出された概念である。

## (2) 二諦を〈同一自体にして別異反体〉と見なす解釈

他方、二諦を〈同一自体にして別異反体〉と見なす解釈は、トルンパの弟子の一人と云われるチャパの見解である。即ち、チャパは、『中観提要』において、分類の意味の科段を六つに分けて詳しく解説しているが（同 pp. 2-13）、そのうちの第二の科段「同一が否定された別異を否定すること」において、このトルンパの見解を否定している。

「また或る者は、「真実の事物として空である無否定（*bden pa'i dngos pos stong pa'i med dgag*, i.e., *bden stong*）は、事物ないし非否定<sup>4)</sup>の実体ではない。それ故、勝義諦は、諸世俗と同じもの（*de nyid*）とも他のものとも言表されないものであるので、〔二諦は〕〈同一が否定された別異（*gcig pa bkag pa'i tha dad*）〉である」（cf.『教次第』p.610.18f.）と云うが、それは正しくない。なぜならば、(1) 直接的対立（*'dngos 'gal*）が法性となるからであり、(2) 真実の事物が成立することになるからである。」（『中観提要』pp.2.20-3.2<sup>5)</sup>）

以下、二つの科段を立てて、詳しくこの見解を否定した後で、世俗諦と勝義諦が同一自体であることを示す『菩提心釈』68を聖言として提示して（『中観提要』p.7）、最後に、自説をこう提示している。

「第四、自説を設定すること。それ故、〔二月が顕現する〕眼識の単一の自体は、〔その〕把握対象である二月に依拠して誤知であるが、知の自体に依拠して、〔自身を直観する自己認識の〕把握対象（＝眼識自身）に対して不迷乱な直接知覚であるのと同様に、この所知の集合体（*shes bya'i tshogs*, i.e., *chos can dang chos nyid*）は、究極（＝空性）を考察する認識手段の対象として、非否定は何も成立しないが、〔非否定が何も〕成立しないこと自体（＝無否定）は、究極を考察する〔認識手段の〕認識対象として存するので、勝義諦である。他方、〔究極を〕考察しない〔認識手段の〕側において、認識対象と所知と顕現と目的達成と無常等は非否定として存するが、非否定として存することそれ自体は、究極を考察する〔認識手段の〕認識対象として存しないので、世俗諦である。〔それ故、〕二諦は、〈同一自体にして別異反体（*ngo bo gcig la ldog pa tha dad pa*）〉に他ならない。」（『中観提要』p.10.6-12）

同様の見解は、チャパの『二諦分別論註』にも見られる（同5b6-8,6b4-5）。

### 3. 二諦の分類の意味に関するサキヤ派の解釈

以上、二諦の分類の意味を巡って、サンプ系の学統に二つの異なる解釈が起こったことが確認されたが、コラムパは、『了義解明』において、分類の意味を、(1) 別異実体（*rdzas tha dad*）、(2) 同一自体にして別異反体、(3) 異名の別異（*rnam grangs pa'i tha dad*）、(4) 同一が否定された別異の四つに分けて（同p.74, cf.『牟尼密意解明』p.134f.）、そのうち、〈同一自体にして別異反体〉と見なす説をチャパの名を明示した上で批判している（同p.75）。さらにその後で、チャパに随順して二諦を〈同一自体にして別異反体〉と見なすゲルク派を「後代の〔自身を〕中観派と思い込んでいる或る者（*physis kyi dBu ma par rlom pa kha cig*）」と称して批判し（同p.76f.）、最後に自説をこう提示している。

「吉祥なるサキヤ・パンディタのご主張によれば、経典（=『解深密経』）に同一と別異に対して過失が述べられたのは、勝義を主題としたものであるので、勝義として、[二諦は]同一と別異の両者から離れているが、言説として、事物と非事物のように、〈同一が否定された別異〉であると説かれたことは、正理により妥当であることは明らかである。」（『了義解明』 p. 77.10-13）

ここでコラムパは、サパン（Sa skya paṇḍita kun dga' rgyal mtshan, 1182-1251）の見解として、勝義としては、二諦は同一と別異の何れでもないが、言説としては、〈同一が否定された別異〉であるという見解を自説としている。これは、基本的にトルンパの見解に随順するものであり、ゲルク派とは見解を異にしていることが分かる。ちなみに、ここでサパンの見解とされたものは、『牟尼密意解明』に基づくが（同 pp. 135.19-135.6）、そこでサパンは、言説の立場としては、〈無区別の自体にして別異反体〉か、あるいは、〈それ自体とも他のものとも言表されないもの（=同一が否定された別異）〉の何れかと規定しており、この点に曖昧さが認められるが、少なくともコランパは、このうち、後者のみをサパンの密意として解釈した模様である。

## 結語

以上、二諦の分類の意味に関して、サンプ系の初期の典籍とゲルク派及びサキヤ派の後期の典籍を資料として検討を加えた。結論を纏めるならば、以下の通りである。

1. ツォンカパは、二諦の分類の意味について、初期チベット人学者の解釈として〈同一が否定された別異〉と〈同一自体にして別異反体〉の二つの解釈があることを示したが、この二つの解釈のうち、前者はトルンパの解釈、後者はチャパの解釈であることが、彼らの原典資料から確認された。
2. そのうち、チャパは、『菩提心釈』68等に基づき、二諦を所作と無常の如く、〈同一自体にして別異反体〉と解釈したが、その解釈は、典拠とともに、ツォンカパにも受け継がれ、ゲルク派の定説となった。
3. 他方、二諦を〈同一が否定された別異〉と見なすトルンパの解釈は、コラムパ等のサキヤ派に受け継がれ、サキヤ派の定説となった。

従来は、空性を知の対象として存在すると見做すツォンカパの中観説は、ラマ・ウマパを介して文殊菩薩から授かった独自の教えとされてきたが、その伝承は、『神話』の域を出ず、実際には、前稿で指摘したように、チャパ系統の中観

説がその源流となった可能性があり、その点が本稿でも原典資料に基づき確認されたことになる。同様の文献学的検証作業は今後も引き続き行う必要があるが、このように、ツォンカパの中観説の根本に自立派の学統を受け継ぐチャパ系統の解釈が暗に導入されていることは、彼の中観思想を検討する上で極めて重要な研究の視座を提供するものである。端的には、チャンドラキールティを批判しジュニャーニヤガルバ等の自立派説に立脚するチャパ系統の学統とチャンドラキールティの帰謬派説に立脚するパツァブ翻訳師系統の学統という相反する二つの学統を如何にツォンカパが受け止め、自身の中観説を形成したのかということは、ツォンカパの中観思想研究において、最重要の検討課題の一つと言える。

- 1) 松本史朗 1982「チベットの中観思想」『東洋学術研究』21(2), p.161 参照。 2) 西沢史仁 2019「チベット初期中観思想における空性理解：ゴク翻訳師、トルンパ、ギャマルワ、チャパ」『日本西蔵学会々報』64（予定）参照。 3) この箇所はツルティム・ケサン、高田順仁 1996『ツォンカパ中観哲学の研究 I』（文栄堂, p.85）に訳出されているが、ここでは拙訳を挙げる。 4) 底本では, dngos po[‘i ma] yin dag と記されるが、『カダム全集』第七巻所収の写本の読み (Ms. 2a3: dngos po’am ma yin dgag) を取る。 5) この箇所は、森山清徹 2001「チャパチョキセンゲの二諦説：dBU ma Śar gyi ston thun 和訳研究」(『香川孝雄博士古稀記念論集 仏教学浄土学研究』永田文昌堂, p.190) に訳出されているが、gcig pa bkag pa'i tha dad を「一方を否定する区別」と訳す等誤訳が多いので、ここでは拙訳を挙げる。

〈文献表〉『見解弁別』：Go rams pa bsod nams seng ge, *lTa ba'i shan 'byed theg chog gnad kyi zla zer*. In: *Kun mkhyen go rams pa bsod nams seng ge'i gsung 'bum*, Vol. 5, Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2013, pp. 456–515. 『道次第小論』：Tsong kha pa blo bzang grags pa, *Byang chub lam gyi rim pa*. bKra shis lhun po ed. 『密意解明』：同, *dBu ma la 'jug pai rgya cher bshad pa dGongs pa rab tu gsal ba*. bKra shis lhun po ed. 『教次第』：Gro lung pa blo gros 'byung gnas, *bDe bar gshegs pa'i bstan pa rin po che la 'jug pa'i rin chen phreng ba*. In: *Gro lung pa blo gros 'byung gnas kyi gsung chos skor*, smad cha. Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2009. 『中観提要』：Phya pa chos kyi seng ge, *dBu ma shar gsum gyi stong thun*. Tauscher, Helmut (ed.), *Phya pa chos kyi sen ge: dBU ma shar gsum gyi stong thun*. Wien, 1999. 『二諦分別論註』：同, *Phya pa chos seng gis mdzad pa'i dBU ma bden gnyis kyi 'grel pa*. In: *bKa' gdams gsung 'bum*, Vol. 6, pp. 185–250. 『了義解明』：Go rams pa bsod nams seng ge, *rGyal ba thams cad kyi thugs kyi dgongs pa zab mo dBU ma'i de kho na nyid spyi'i ngag gis ston pa Nges don rab gsal*. In: *Kun mkhyen go rams pa bsod nams seng ge'i gsung 'bum*, Vol. 5, pp. 1–283. 『牟尼密意解明』：Sa pañ kun dga' rgyal mtshan, *Thub pa'i dgongs pa rab tu gsal ba*. In: *Sa pañ kun dga' rgyal mtshan gyi gsung 'bum*, Vol. 1, Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang, 1992, pp. 1–212.

〈キーワード〉 中観, 二諦説, 分類の意味, トルンパ, チャパ, ツォンカパ, コラムパ

(東京大学非常勤講師, 博士(文学))